



RAKUWA
lecture of health

第109回 らくわ健康教室

2012年7月25日



訪問リハビリってなあに？

～暮らしにつなげる訪問リハビリ～

洛和会みささぎ病院
リハビリテーション科 副係長 理学療法士 白井 健雄



子どもたちのために、未来へ…

洛和会ヘルスケアシステム[®]

洛和会丸太町病院 洛和会音羽病院
洛和会音羽記念病院 洛和会みささぎ病院



RAKUWA
lecture of health

第109回 らくわ健康教室 2012年7月25日

訪問リハビリってなあに？

～暮らしにつながる訪問リハビリ～

右大腿骨頸部骨折の80歳代女性の場合（人工骨頭置換術後）

現病歴

自宅前にある三段の石段につまづかれて転倒。

すぐに洛和会音羽病院に救急搬送されるも骨折の診断され、同日入院。入院一週間後に人工骨頭置換手術を受けられる。



病院でのリハビリ

<手術前>

- ベッド上で安静にすることで起きる筋肉の衰えや関節の硬化を予防するためのトレーニングや関節を動かすリハビリを行った。

<手術後>

- 安静にすることで起きる深部静脈血栓の予防を目的とした足の運動
- 関節が硬くなってしまふことを防止するための関節運動
- 歩く練習

- 階段を昇り降りする練習
- 床への立ち座り練習
- 靴下、ズボンをはく練習
- お風呂をまたぐ練習



退院前

患者さま（要支援2）、ご家族、医師、看護師、リハビリ担当スタッフ、相談員、ケアマネジャーで退院前カンファレンスを行った。

- 現在の状態
- 考えられる問題点
- 具体的な退院時期
- 福祉用具の必要性の検討
- 介護保険サービス導入時期 など

ご自宅に導入した福祉用具

- 石段手すり
- 上がりかまち框部段差解消
- 浴室手すり
- シャワーチェア
- 昇降ベッド
- T字杖





残された問題点

- 実際の家屋における動作方法
- 福祉用具の使用方法
- 関節可動域の維持の必要
- ご自宅周辺での歩行練習
- 転倒による再骨折の可能性

実施された訪問リハビリ

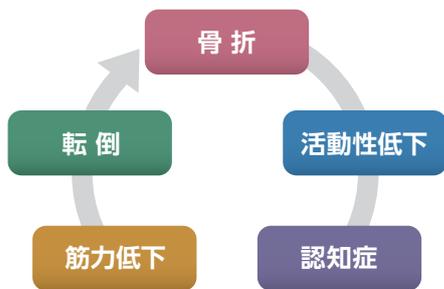
- ご自宅でのお風呂のまたぎ動作
- 関節を動かす練習
- 自主トレーニング方法の指導
- 杖を使用した
ご自宅周辺での歩行練習



再転倒防止の重要性

退院後、継続してリハビリを行うと、退院時の日常生活自立度が維持されるという調査結果があります。しかし、外出の機会が減ってしまったりすることで、筋力低下や認知症が発症、進行し再転倒してしまう可能性があります。

再転倒を防止するリハビリが必要



脳梗塞（左片まひ）の 70歳代男性の場合

現病歴

約10年前、脳梗塞を発症。左片まひの後遺症は残ったが、リハビリをされ身の回りのことや歩行は可能となり、在宅復帰された。



その後

夫人が介護者として身の回りの世話をほとんど行っていたが、最近歩きにくくなってきたこと、趣味である囲碁教室に足を向けなくなったことを主治医に相談したところ、廃用症候群と診断された。



問題点

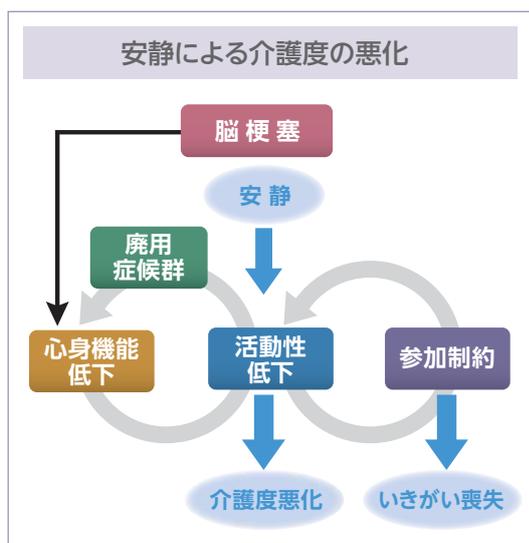
- 安静により関節が硬くなってきてしまった
- 安静により筋力が低下し、そのため歩行困難に
- 歩行が困難となってしまったことにより引きこもりがちになってしまった
- ご家族による過度の介護
- 廃用症候群となり、生きがいがまで喪失してしまった

実施された訪問リハビリ

- 硬くなってしまった関節を動かす練習、筋力強化練習
- 歩行動作の再学習
- 自主トレーニング指導
- 新たな福祉用具の導入のご提案
- 引きこもり防止を目的とした屋外歩行練習
- ご家族に対して介護方法指導



疾患をきっかけに、再骨折や廃用症候群となり、徐々に介護度が上がってしまう可能性があります。



まとめ



同じ疾患名でも受傷時の状況、治療内容、年齢、性別などにより個々に異なります。また、自宅の状況やその周辺、同居家族の有無などの生活環境も個々に異なります。

訪問リハビリは、疾患の特性を踏まえ、病院では行えない自宅の環境に合わせたリハビリを提供していくものです。その最大の目的は、ある疾患をきっかけとして徐々に、より多くの介護が必要な状態となってしまうようにすることです。そして、その方が住み慣れた地域で、その方らしく長く生活を続けていただくことです。

つまり、訪問リハビリとは「暮らしにつなげる」ものです。

